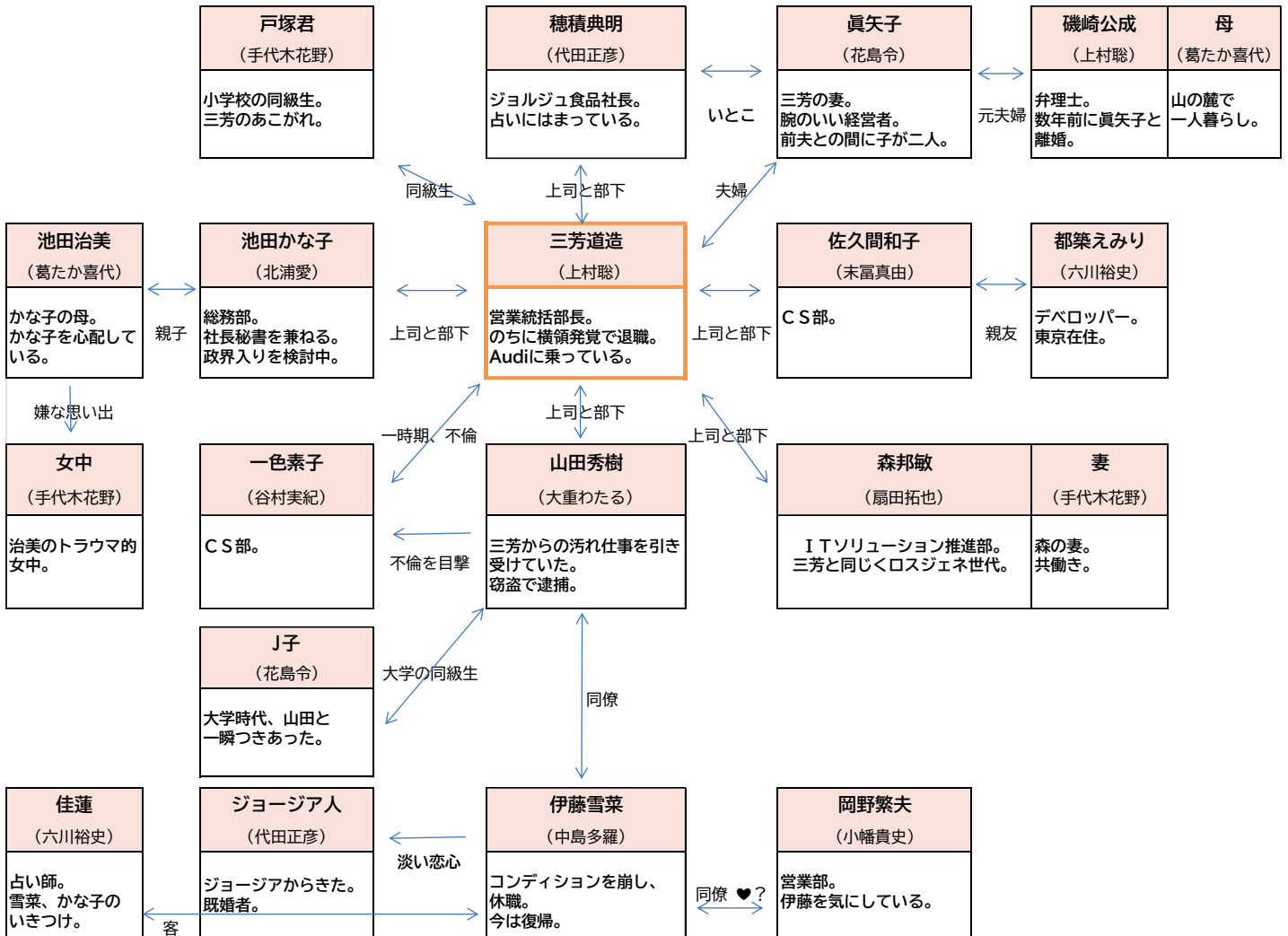


◆◆◆◆◆ 糸山秋子『御社のチャラ男』について ◆◆◆◆◆

地方都市にある「ジョルジュ食品」の社員と、その周辺の人々を章ごとに語り手にした連作短編集。人々はそれぞれに、社内ではひそかにチャラ男と呼ばれる三芳道造を語る。



政治家を目指しながらジョルジュ食品で働く総務部の池田かな子は、いかにもチャラ男然としたイメージを語るが、複数の「証言」に触れるたび、三芳の人物像は多面性を帯びてくる。

登場人物たちは、三芳について語り、自らについて語り、現在に至るいきさつを語る。

会社も屑だし俺も屑だとつぶやく岡野繁夫、会社という地獄から抜け出したい森邦敏、誰を味方につけるかが重要だと悟っている池田かな子、娘は本当にちゃんとやっていけるのだろうかと思案する池田治美、傷つかない術を心得ている佐久間和子、三芳を貶めることでなんとか自分を保っている磯崎公成、自分だけが知る三芳道造について想いを馳せる一色素子、自分はたぶん変われないとあきらめている山田秀樹、自らを報われないと考える三芳道造。

ジョルジュ食品社長の穂積典明、社長のいとこで三芳の妻である真矢子、佐久間の親友えみり、三芳の幼なじみだった戸塚君、などなど、章ごとの語り手以外にも様々な人物が登場します。

どの章のどの人物にも少しずつ自分がいるような、そんな親近感を覚える小説だと思います。